

『橋のない川』における内地在住朝鮮半島出身者 ——戦後的再構築としての被差別部落民との共闘関係

加賀谷 真澄

はじめに

『橋のない川』の第一巻相当分は一九五九年、住井すゑ（一九〇二～一九九七年）が部落解放研究所の機関誌『部落』に発表した作品である。作品上の時代設定は、一九〇八年～一九二八年前後である。この作品は『部落』誌上に第一巻までが連載され、そののち第二巻から四巻までが新潮社から書き下ろし刊行（一九六一～一九六四年）され、一度終了している。これ以降、六年後の一九七〇年に第五巻が発表されてから、一九九二年出版の第七巻にいたるまで、三三年間でのべ八〇〇万部の出版部数を重ねるロングセラーとなった。

一九五八年、住井は部落解放同盟を訪れ、その時に取材先を紹介されている。その後発表された『橋のない川』第一巻は、一般読者にはなじみの薄い『部落』に掲載されたにもかかわらず、全国的な人気を得るようになったが、これは一九五〇年代における同和对策審議会設置や、その後の同和对策基本法の立法化などの行政側の動きと、解放同盟の運動が社会的に注目を集めたことに起因するだろう。

さて作品は第四巻で一度終了している。しかし、十分に描き切れなかったという思いに突き動かされ、六年後の一九七〇年、住井は第五巻を書き下ろして発表している。四巻から五巻までの間の六年間、住井が再びペンを執るようになるまで、住井に、また日本社会にどのような変化があったのだろうか。

一九七〇年に発表され、一九二二年を舞台とする第五巻の冒頭には、内地在住朝鮮半島出身者が登場し、被差別部落民衆と、差別に苦しむ者どうしとしての共感の絆を結ぶ。住井の意図は、被差別部落民衆ばかりでなく、被植民者もまた天皇を頂点とする国家体制に組み込まれ苦難を強いられており、両者はそのことに自覚的であったと表象するところにあったのだろう。天皇制を問い直す要素として朝鮮半島の人々の存在が、より一層焦点化されて描かれるようになっていく。

本論の基本的な立場は、作品に表れる天皇制への異議申し立ての姿勢や、朝鮮半島出身者と被差別部落民衆との連帯という表象のありかたは、作品が設定された一九二〇年代のものとしては、説得力をもつものではないというものである。むしろ、作品が構想され創作され発表された時代における、天皇制や部落問題、植民地問題に関する住井の意識が、作品に色濃く反映されている。本論では、住井が一度筆を置いてから再び執るまでの間に住井に起きた変化を、時代的な流れと照らし合わせて検討する。「天皇を頂点とする国家の枠組み」の中で社会の最底辺に置かれた人々の物語の中に、内地在住朝鮮半島出身者とい

う存在が大きく扱われるようになったことについて、住井の問題意識の変化を検討することによって論じていきたい。

『橋のない川』について、これまで内地在住朝鮮半島出身者の表象という面からなされた研究はない。この問題を、住井の戦前から敗戦後にかけての意識の変化を明らかにすることによって考察していきたい。より具体的にいえば、敗戦後における住井の天皇制観の変化、一九五〇年代以降の部落解放運動の高まりや、一九五九年に始まる北朝鮮への「帰国」運動から、住井の創作活動が受けた影響を、時代的文脈に即して検討することになる。本論の結論を先取りしていえば、住井は敗戦後の意識や価値観から、一九二〇年代における被差別部落民衆、内地在住朝鮮半島出身者（とくに「白丁」^{ペッチョン}）²と呼ばれた朝鮮半島の被差別部落民衆）を、「天皇制の下で差別に苦しむ同胞」というカテゴリーに包摂し、単純化しているということになる。

1. 理想化された被抑圧者どうしの絆

(1) 『橋のない川』に対する批判

現在の評価では、住井は、天皇制反対の作家、そして反戦・反差別の人として知られているが、このような評価が下されるようになったのは、『橋のない川』の成功によって住井の存在が世間に知られるようになってからである。住井は、新聞やテレビなどにもたびたび登場し、天皇制の廃止を訴え続けたが、その主張の内容は、天皇を冠したシステムがあるからこそ、頂点と最底辺という差別が何の疑問もなく受け入れられて存続しているということ、そして、国家のトップに神格化された存在がいて、そこに権力が集中することが国家観の紛争のもとであるというものであった³。

明治の解放令以降、「エタ」や「非人」という身分から解放されたはずの人々が住む集落は、「特殊部落」と新たな名称で呼ばれるようになったが、事実上、差別の実態は変わらなかったことは、広く知られている史実であろう。住井が描くのは、一九〇〇年代初頭の「特殊部落」に生きるひとびとである。

天皇制を緒差別の根幹とみなす住井の世界観で描かれた『橋のない川』は、差別の根源を偏見や憎悪という個人の問題から、国家という外の世界へ向けさせる画期的なものであったが、また、そこには批判もある。物語の中では、国家の経済システムや、国家間の摩擦についても触れられてはいるものの、それらすべてを天皇制というシステムから眺め、そこに終始している。つまり、住井の差別に対する理解は、天皇制という枠組のみにとどまっているため、国家制度全体から見る観点が弱くなっているという指摘があるのだ⁴。

また、人物描写について向けられた批判も多い。畑中家の祖母、ぬいは一家の精神的支柱のような存在である。たびたび発せられる短い言葉から、ぬいが土に生きる生活者として、日々の暮らしの中で国家のしくみを見抜いていることが示される。他の登場人物たち

も、差別の根源を天皇制に求めており、自分たちが社会制度上の犠牲者であることに自覚的である。しかし、大正当時の部落民は、天皇制イデオロギーに親近感を持ち、水平社の代表的なメンバーも天皇崇拝を否定するものはいなかった。このような人物描写は史実に反しており、時代的齟齬を生じるという指摘である。また、部落の人々に悪人がいないこと、さらに、ぬいとふでの間に、姑と嫁との間の確執が全く見られないことなども指摘されている⁵。これらの批判が向けられた部分は、現代の読者にとっては、底辺に生きる人々の強い絆を表すものとして、小説の魅力となるが、大正当時の史実と照らし合わせるならば、リアリティに欠けていると言わざるを得ない。

『橋のない川』で、作中人物は、天皇制と被差別部落制度の関係を鋭敏に理解している人物であるとして表象されている。例として、畑中家のぬいと、大阪で働いていた部落出身女性、なつとの会話をみてみたい。この場面では、店が火事になったうえに、部落外の男性との結婚もうまくいかず、辛い胸のうちのぬいに訴えている。

(なつ：引用者注)「(前略) どこちごうてるならともかく、どこもちごうたところがないのに、なんでわてらはエッタですネ。」

(ぬい：引用者注)「そんならきくけどな、大将や大臣や天皇さんは、どこぞちごてるか、おなつさん。」

(ぬい：引用者注)「(前略) しまいには死ぬにきまつてる天皇さんや大臣さんが、天皇さんや、大臣さんやていうて威張っていいくらしをしたはる分だけ、わいらがエッタで苦勞をするようにできたるネ。」(一巻、四一二頁)

このあと、二人の会話は、このような制度を作った人間が誰であるか、という問題にまで及ぶが、ぬいは、「そら、悪い奴にきまつたるがな」(一巻、四一二頁)と答える。

天皇制と被差別部落制度の関係を鋭敏に理解している人物として被差別部落民衆を表象することは、住井の戦後の天皇制論を、作品空間に非歴史的に投射したものであるというのが、本論の立場である。作品が、創作された時代の価値観を反映してしまうのは、当然過ぎることともいえるのだが、筆者としては、この住井の時代錯誤は、敗戦前の作品において、彼女が天皇崇拝を美化して描いていたこと、あるいは戦争協力の効果をもつ作品を発表していたという問題を、隠蔽・回避しようとする態度と一脈通じているのではないか、というものである。

物語の構成については、二巻以降から畑中家次男孝二が主人公となり、彼をとりまく「小森」の人々とその周辺が描かれるようになる。一巻までの主人公である長男誠太郎とは違った穏やかでおとなしい性質の孝二が外の世界に対して目が開かれていく姿が描かれる。孝二が差別の中で人間としての誇りに目覚めていく過程は、人権意識が高揚していく時代の流れとともにあり、いよいよ水平社が創立される直前までで第四巻の物語は終わっている。

物語の第四巻までは畑中家と「小森」の人々の暮らしに焦点が当てられているが、第五巻以降からは登場人物たちよりも社会的背景が前景化し、社会事象の解説が主になっている。特に、住井の遺作となった第七巻は、当時の新聞記事の紹介と、それに促されるかたちで主人公が国家制度を考えるという場面が多くの部分を占めている。このような物語構成は、「編年体による説明的叙述に終始しており、文学的形象性という点での課題を残している」⁶のものであり、しばしば言及される住井の児童文学作品についての「テーマ主義で図式化されたワンパターン」⁷という批判に通じる。

こうしてみると、『橋のない川』は住井の「反天皇制」と「反差別」という、敗戦後において形成された信念から創作されたものであることが明らかである。作品を貫くテーマは、「反天皇制」と「反差別」であるが、このテーマを貫こうとするため、住井は大正当時の部落をめぐる状況を、自分の主張に引き寄せるように書き換えているのである。では、なぜ住井は、このような描き方をしたのだろうか。

この問いについては、住井を部落問題についての意識改革に多大な貢献をした『橋のない川』の作者として捉えるのみでなく、戦時中、体制側に協力的な作品を発表した作家であることも含めて考えなければならない。そうすることで、『橋のない川』における不自然さが、戦後の民主化の流れの中で、もと体制寄りであった作家の内部に生じた戦前への反動であり、理想化であったことに気付かされるのである。

（2）戦前の児童文学における内地在住朝鮮半島出身者と天皇主義者としての敗戦前の住井

住井は、戦前から敗戦後にかけて、数多くの児童文学を発表している。基本的に住井は農民作家であり、土に生きる農民を主人公として描いてきた。ただし、戦前と敗戦後では、作品の性質は全く異なっている。

『住井すゑ作品集』第三集には、住井が戦前から敗戦後にかけて発表した作品が収められている。この中で注目したいのは、一九四一年に出版された作品集『子供の村』⁸である。ここに収録された七作品は、いずれも農村の人々の暮らしを描いたものである。『子供の村』に収録された七作品すべてに戦争肯定的な色合いが見られるが、このうち、被侵略国に対する住井の見方が表れている「麦の芽だち」を見てみたい。

「麦の芽だち」は、戦地に赴いた兄を思う弟の物語である。主人公の亨二の家では、兄の俊一が間もなく出征することになっている。俊一は、戦争に行けば、命を失うことになると覚悟しているが、一つだけ心残りがあった。それは、村でこれまでなされていなかった裏作（大小麦）に取り組むことであった。そんな俊一に向かって父は次のように言う。

「俊一、何でもお前の思う通りにやれ。生命をも国に捧げて出征するのに、あとに心残りがあっては十分の働きが出来まいからなア。」

これに対して、俊一は「日本男児」らしく勇ましい返答で返す。

「お父さん、よく言って下さいました。おかげで、僕の生命は二つに使えます。国へ二つのご奉公。男として、こんな名誉があるでしょうか。しかし、たった一つ気がかりなのは…」⁹

俊一が生命を捧げる二つの奉公とは、戦争に行くこと、そして村のために麦を作ることであるが、村のため＝国のためという図式が分かる発言である。そして、俊一の気がかりとは、自分が出征する前に麦を作付けたら、その後、どうなるかという心配であった。しかし、主人公の亨二が兄を安心させるように言う。

「僕は牛で田圃を起こすけいこをするよ。そして麦をどっさり作ってお国のためにつくすんだ」¹⁰

農民が豊かさを目指して労働するのは、お国の繁栄ためであるという意識である。俊一が出征した後、物語は一年後に移る。「この一年のうちに、支那の要都は数え切れない程陥落した。そして、俊一にも幾つかの巧妙談はあったが、故郷でもそれに負けない働きがつけられていた」¹¹のだった。そして、銃後の農村で、亨二は戦地の兄を思って手紙を書く。

(前略) 世界の日本として、益々重い地位に立つ日本のために、僕達は将来ものを作る立派な百姓となるであろうことを、今日のよき日に誓います。

どうか兄さん、支那の大地には日本軍の愛と誠の種子を蒔いて来て下さい。その種子もやがては芽を出して黄金色の実を結ぶことでしょう。そして僕は兄さんこそ、そういう立派な種子を蒔くにふさわしい軍人だと信じているのです。¹²

この作品だけでなく、『子供の村』七編すべてに共通するのは、農民の労働が目指すところは、戦時体制の国家のためであるという意識である。ここには、反戦作家としての姿勢は見られない。また、被占領国側、抑圧される側の視点が一切ない。この特徴が顕著なのが、次に紹介する「天地の歌」である。

「天地の歌」の大筋は、東京の都会っ子が祖父の住む奈良に出かけ、農業を手伝うことによって労働の大切さを身にしみて実感するというものである。この物語には内地在住朝鮮半島出身者の男子児童、金宗円が登場するが、運動能力が優れていて目立つため、同級生たちから「何だ、半島人のくせに」などと言われ、ねたみを買ってしまう。ある日、金の家に日の丸が掲げられていたことから、同級生の一人がその理由を宗円に問い詰めると

いう場面がある。同級生が大勢集まってくる中で、宗円は事情を答える。それは、朝鮮半島で暮らしている宗円の兄が義勇兵に応募し、合格したお祝いであったというものであった。宗円の家では、その日戦地に向かった兄のために国旗を掲げたというわけだった。これを聞いた児童たちは、口ぐちに宗円の兄を褒めたたえる。

「ずいぶん立派ね。それでこそ日本人だと思うわ。」

「金宗円君の兄さん、万歳！」¹³

日の丸が掲揚されたことによって、児童たちの「半島人」に対する偏見は好意的なものへと転じ、内地在住朝鮮半島出身者の児童は日本人としての自意識を宣言し、また日本の児童たちは、植民地出身の人間を「日本人」と見なすことで、異文化間の摩擦はいとも簡単に解決されている。戦時下で発表された住井の児童文学は、すべてこのような体制寄りのものであった。しかし、これより約二〇年後の作品『橋のない川』においては、内地在住朝鮮半島出身者の人々は民族意識と誇りを持つ人々として描かれるようになる。

前田均は、住井の戦争協力者としての責任を追及する論の中で、住井が植民地支配をどう考えていたかについて雑誌『Ronza』¹⁴での住井の対談を取り上げている。この対談の中で、住井は文化人の戦争翼賛の姿と、住井自身の作品について問われ、「作家や文士なんてのは権力の側についていないと喰いはぐっちゃうからね」と答えており、自分の作品については「書いたというより、書かされちゃうんですね、あの頃は」と答えている。この対談からは、戦時迎合作家であったことについて住井の反省は感じられない。これ以後も、戦時中の作家の責任について、住井自身の言葉で語られることはなかった。

敗戦後、住井が一八〇度の転身をはかり、社会問題に自覚的な作家となったきっかけはあったのだろうか。自己の見方に大きな影響を与えた出来事として、住井が折に触れて語る経験がある。それは、『橋のない川』執筆前、取材に出かけた先での経験であった。その時の経緯を次に紹介したい。

一九五八年、教育現場に勤務評定が持ち込まれることに反対して、九州と和歌山で同盟休校が生まれ、新聞が教育現場の争議を連日報道した。住井は、和歌山の被差別部落に取材に行ったが、解放同盟の主張は、校長が教師の勤務を評価する絶対的立場に置かれたら、平和憲法遵守を唱える教師や、平等を訴える教師は、何も言えなくなるであろうというものであった。住井は部落の子供たちと同行して「つづり方兄妹」という映画を観に行く。これは、学校単位で全児童に映画鑑賞させるという教育的な目的であったが、この時だけは同盟休校も例外で、部落の子供たちも映画館へと足を運んだ。この時、住井はバスに乗る児童たちを見て、部落と一般の子供の違いに気付き、次のように述べている。

一般の子どもは我がちに、上級生から乗ってすわります。ところが、同盟休校をしている大谷の子どもは行儀よく上級生が入口に立って、小さいのからすわらせませす(中

略) 痛めつけられている部落の子どもは、人間をいたわることを知っているから、小さいものからすわらせませす。私が、一般の子どもは行儀がよくて、部落の子どもはがさつかもしれないと思っておったのは、偏見であった、とそこで気づいたわけなんです。¹⁵

住井は和歌山の部落の子供たちとのやりとりを通じて、開眼したようだが、しかし、部落の子供と「一般」の子供を区別すること自体が偏見であることには気づいていない。部落が争議のただなかにあったことを考えると、部落の子供たちは、この時期にとりわけ自覚的に物事を考え行動し、結束力を強めていたに違いなかったであろう。それを住井は、差別されている部落の子供たちは、人の痛みに敏感であるはずだ、という先入観から、取材先で見た光景を、部落の子供たちの特質として捉えてしまったのである。

ここで、先に指摘した『橋のない川』における不自然さの問題に戻ってみたい。住井が、『橋のない川』を執筆する直前、部落の子供たちをどう見ていたかを知れば、不自然さについての答えが自ずと得られるのではないか。つまり、住井にも部落外の人間としての先入観があり、それを通して子供たちを見ていた、ということである。謙虚な心であたかなまなざしを持って観察していたには違いないが、『橋のない川』において、貧しい生活で差別に苦しむ人々の連帯は、住井の印象のまま、美化され、理想化された人間社会として描き出されているのである。

『橋のない川』の成功によって、住井は「反戦」「反差別」の作家として、多くの信奉者を集め、ある意味で神格化されてしまった。だが、住井はスタートからそのような作家ではなく、戦後、知見を広め、意識を高めていった作家と見るべきであろう。そして、住井の信念が『橋のない川』によって確固たるものになるまでには、人間的な葛藤があり、時には生きるために権力に迎合することもあったのである。

2. 住井による内地在住朝鮮半島出身者表象

作品の人物描写の不自然さは、執筆当時の時代的な背景にその原因が求められる。小説の時代背景は大正期であるが、住井が執筆した一九五〇～六〇年代は、日本各地で部落解放同盟による糾弾、争議があり、戦後において、部落解放史における新たな局面を迎えた時期である。物語の登場人物たちの先進的な考えや、一条乱れぬ団結が時代的な齟齬を生じさせるのは、住井が一九五〇～六〇年代の感覚を物語に盛り込んでいったためである。この時期解放運動は、部落差別を放置してきた行政に国策を求める差別行政糾弾闘争を展開していた。

一九五七年、部落解放同盟一二大会以降、部落改善施策闘争が地方行政を超え、政府レベルへと向けられるようになった。その結果、一九五八年「同和問題閣僚懇談会」が設置される。また、一九六〇年、政府は、「同和对策審議会設置法」を制定するが、その後も解

放運動は盛り上がりを見せ、一九六一年解放要求貫徹国民大会では、福岡、長野から東京まで二〇〇〇人が行進、また、六〇万人にのぼる請願署名などが集められている。こうした運動が実を結び、一九六五年の内閣同和对策審議会答申、そして一九六九年の同和对策事業特別措置法の制定へとつながっていった¹⁶。先に述べたように、住井が和歌山の被差別部落を取材したのは、このような部落解放運動高揚期のさなかであり、『橋のない川』における部落民の意識の高さや団結は、一九五〇年代以降の部落解放運動に沿って描かれたものなのである。

一九五〇～六〇年代の感覚を投影するかたちで作品を創造したということは、内地在住朝鮮半島出身者の表象に関してもいえることだろう。内地在住朝鮮半島出身者は、第五巻までは登場人物としては登場しなかったものである。住井は、内地在住朝鮮半島出身者を被差別部落民衆と同じく、天皇制を頂点とする国家により搾取され抑圧される者として描いているが、これは住井の一九五〇～六〇年代における価値観が強力に投影された表象のありかたである。

やや議論を先取りすることになるが、住井が、敗戦前の内地在住朝鮮半島出身者を好意的に描き出そうとするとき、執筆の時点での大事件、戦後的な意味での「在日」のひとびとの、北朝鮮への帰国運動の盛り上がり、そこに強い影響を及ぼしている点とみてよいという点を指摘しておきたい。北朝鮮への帰国第一次船が、北朝鮮へ向けて出港した年は一九五九年であり、第五巻が執筆された時期より一年早い。しかし、帰国希望者が年を追うごとに増加していったことを考えると、住井が『橋のない川』執筆当初から内地在住朝鮮半島出身者についての問題意識を持っていたと見るより、敗戦後における部落解放運動の盛り上がりと同じく、当時の社会問題として注目を集めていた問題を作品に取り込もうとしたと考えられる。いわば、敗戦前の内地在住朝鮮半島出身者を、戦後的な「在日」を見る視点から見ているのである。

それでは、第五巻以降、内地在住朝鮮半島出身者の人々が登場し、部落の人間と直接かわりを持つ場面を検討してみる。一つ目は、五巻の冒頭で「小森」に傘を売りに来る行商として登場する場面である。二つ目は、関東大震災の際の、流言によって朝鮮人の人々が虐殺され、その後、「小森」出身の女性が、内地在住朝鮮半島出身者の男性と結婚していたことが明らかになる場面である。

第五巻の冒頭で、部落の生業である草履作りに従事している孝二の仕事場に、傘売りがやって来る場面を見てみたい。物語では、この時点ですでに水平社が結成されている。ここに、内地在住朝鮮半島出身者、^{朴相竜}がやって来て、水平社宣言を見るという設定である。

だが男（朴相竜）の視線は岩蔵小父さんや田村芳松を逸れて仕事場の片隅に凝集した。ちょうど孝二の真後ろの壁面で、そこに「水平社宣言」の全文が墨痕鮮やかに書き上[↑]ばされていたのだ（中略）男はうなずき、うなずき、またうなずき。

「なるほど。」 「ほんまや。」 「道理や！」 そんな思いがつきからつきへと湧き上がり、駆けめぐっているようだ。(五巻、一七頁)

この朴相竜という人物は、のちに第七巻に再び登場し、白丁であることが明らかになる。総督府の土地事業によって土地を取り上げられた朴は、国を離れざるをえなくなり、六年前に来日した。はじめは「青雲の志を抱いての苦学生^{くがくせい}だした。それが一年ともたずに労働者になって…」(七巻、一〇九頁)という朴は、朝鮮に帰国し、白丁解放運動に身を投じるつもりであるという。

水平社より遅れること一年の一九二三年、朝鮮半島でも朝鮮での被差別民「白丁」解放を目的に^{とくへい}衡平社が結成されたが、この運動の盛り上がり刺激され、朴は故国に帰って運動に身を投じることに決意を固める。行商人と「小森」の人々との出会いは、単なる行きずりの関係に過ぎなかったが、白丁出身の朴は、「小森」の人々を自分と同じ境遇で苦しむ人々だと見なし、「小森」の人々から受けた厚遇を忘れられずに、帰郷前に再び訪れたのだった。そして「小森」の人々もまた、朴が村を去った後も、たびたび彼のことを話題にし、朝鮮半島の人々の苦境を思いやっており、国による差別構造という枠組みの中で、下層に位置づけられた同胞と見なしていることが分かる。

衡平社が結成された翌年、水平社は、第三回大会で「朝鮮ノ衡平運動ト連絡ヲ図ルノ件」を可決した。この年から両者の交流が始まる。衡平社という名前の由来は、「水平よりも、はかりの方が限りなく衡平だから」という理由から来たもので、水平社を意識したものであると言われている¹⁷。衡平運動のリーダーの一人、姜相鍋は東亜日報初代晋州支局長を務めており、社会運動家でもあった。姜は衡平社結成後、京都の七条北部水平社を訪れている。

ところが、朝鮮半島における衡平運動は、結成後まもなく一般市民との衝突が増加し、そしてまた、朝鮮総督府による弾圧などにより、下火となっていく。そして運動の方向性は差別を無くすことよりも、白丁の経済的地位の向上を目指すものに変っていき、一九四〇年には消滅(実質的には一九三五年)している。その後、朝鮮戦争や経済的困窮による人々の移動などによって社会は混乱し、人々の流入出によって、いつの間にか白丁の問題は忘れ去られた。朝鮮半島における差別問題は、社会運動によるものではなく、物理的な事情によって霧消したのである。そして、水平社と衡平社の交流は一九二五年頃にはかげりが見え始め¹⁸、一九二九年には途絶えてしまう。

物語では、白丁の朴と、「小森」の人々は、心を通わせている。しかし一九二〇年代当時の、朝鮮半島出身者に向けられる一般人の視線を、住井が十分に理解していたと思われるのが、次に挙げる場面である。

畑中家の隣家は、志村かねという中年女性が住んでいるが、その娘のはるえは孝二と幼なじみであった。はるえは、一度部落外の一般男性と結婚するが、部落出身を理由に離縁されてしまう。そして東京で二度目の結婚をするのだが、その相手が内地在住朝鮮半島

出身者であった。一子をもうけたばかりのはるえだったが、夫は大地震後の朝鮮人虐殺の犠牲となってしまう。そしてまた、生後間もない幼児は飢餓によってこの世を去ってしまう。こうして、夫と息子を失ったはるえは、他に頼るあてもなく、「小森」に戻ってきたのだった。

はるえの母、かねは、娘が部落民ではない男性と結婚した時、「縁を切った」と言う。それは、一度部落から出てしまえば、一生部落民であることを隠し通せるので、「小森」とのつながりを断ち、差別の桎梏から抜け出すために取って代った言葉であった。しかし、戻ってきた傷心のはるえに、かねは言う。「恥さらし!」「死にくされ!」¹⁹。これは、一度目に親子の縁を切ったのが、娘の幸せを考えてのことであったのが、その後、朝鮮人と再縁したことがかねには受け入れられず、このことを恥と感じたためであった。ここでは差別されている人間が、さらに差別をするという、二重構造が示される。住井はこの構造を見抜いていたといっただろう。にもかかわらず、住井が内地在住朝鮮半島出身者と、被差別部落民衆の連帯を理想化して描いたのは、なぜなのか。

近年、被差別部落と内地在住朝鮮半島出身者の関係をめぐる研究が進んでいるが²⁰、それらは主に生活環境と就労状況、そして行政に対する共闘についてである。水平社と内地在住朝鮮半島出身者の団体は、生活環境改善をめぐる要求や、不当な裁判に対する抗議運動などで、互いに協力を惜しまなかった。しかし、一般の部落民と内地在住朝鮮半島出身者の日常生活レベルにおける関係がどのようなものであったかについて明らかにするのは難しいようだ。植民地時代、仕事を求めて朝鮮半島から渡った人々の多くが部落に流入したことが分かっている²¹。それは、住居の確保が部落では容易であったこと、そして下層労働者としての需要があったためである。当時の内地在住朝鮮半島出身者の人々が部落民と日常的に接する環境にあって、両者の関係はどのようなものであったのだろうか。

戦前からの内地在住朝鮮半島出身者と部落民の関係を歴史的にたどった河明生の研究によると、村の古老に聞き取り調査を行った際、「自分は被差別部落だとは知らないで住んでしまった、気づいてみたら白丁がたくさん周りに住んでいた」と言ったという²²。河は、両者は基本的にはお互いを避けあい、相互間の差別意識は強かったとしている。

一部の人は連帯したかも知れませんが、それは少数派です。韓人、とりわけ一世は自分のことを^{ペンペン}両班の末裔だと信じていました。今は没落しているが血統的に正しいという確信があります。一世は、朝鮮の被差別民衆・白丁を部落民におきかえながら、乱暴な言葉を使えば「あいつらと自分は違うんだ」という優越感をもっていたと思います。部落民の方も乱暴な言葉を使えば「あいつらは植民地民族の二等国民だ」という優越感をもっていたのかもしれない。(一五〇頁)

とはいえ、両者は社会経済的には結びつき、混住していたことから、食用犬の屠殺を内地在住朝鮮半島出身者が部落の業者に頼むなどしており、日常生活において接する機会は

多かったことを河は指摘している。また、同じく内地在住朝鮮半島出身者と部落民の関係を論じた西田²³は、同じ地区に内地在住朝鮮半島出身者が住み着くことを拒否する部落も受け入れる部落もあったこと、部落内の産業で、両者が雇用者と被雇用者に置き換わることもあったことを指摘している。部落民にとって「朝鮮人がいることは当たり前の景色だった」とする一方で、部落に居住する内地在住朝鮮半島出身者と日本人の結婚は非常に少なかったと報告している。

河と西田の研究は、戦前の部落民と内地在住朝鮮半島出身者の関係に焦点を当てたものだが、当時の個人レベルでの関係については、現在のデータと聞き取り調査から推測している。大正当時の両者の関係に迫ることは難しく、言い伝えや現在の両者の意識から深測するしかないが、運動家以外の部落民と内地在住朝鮮半島出身者との間に深い相互理解と連帯は存在しなかったと河と西田は見ている。

『橋のない川』では、部落民が内地在住朝鮮半島出身者を同じ差別に苦しむ同胞として見なしており、両者は深く心を通わせている。また、部落民のはるえが内地在住朝鮮半島出身者と夫婦であったことについては、唯一拒絶的な反応を示したのは、はるえの母、かねのみである。内地在住朝鮮半島出身者を受け入れがたく感じているのは、部落内ではかねだけであるが、むしろ、かねのような反応が当時よく見られたかもしれない。とすると、住井は一般の部落民の感覚を知って描いたにもかかわらず、あえて両者のカップルを描いたことになる。

部落民が内地在住朝鮮半島出身者の人々に共感を覚えたり、心を通わせたりしているのは、住井による理想化である。そして一九七〇年に発表された書き下ろしに、新たに内地在住朝鮮半島出身者が「小森」の人々の人生と交わるように描かれたのは、当時問題になっていた北朝鮮帰還運動が社会問題化したため、住井の意識にのぼったものと思われる。

3. 融和の理想化

住井は、戦前から農民作家として土に生きる人々を描いてきたが、その姿勢は、皇国農民としてのものであり、敗戦後はアナキズム・重農主義的な立場に転じた。もともと活動家でなかった住井は、取材に出かけ、部落をめぐるさまざまな出来事を見聞きするうち、大作『橋のない川』の作者となる自己の資質を育てていった。内地在住朝鮮半島出身者についても同じく、情報と知識を身に着けながら、物語に描いていったのである。

大正当時の部落民と内地在住朝鮮半島出身者との関係性がリアルに描かれることなく、天皇制のもと、差別に苦しむ同胞として単純にひとくくりにされているのは、住井の理解不足を示唆すると同時に、自分の主義に沿わせたいという願望のためである。そしてまた、四巻と五巻の間にある、六年間の空白ののち、内地在住朝鮮半島出身者の人々が物語に登場した背景には、敗戦後の在日朝鮮人をめぐる行政の政策転換があると考えられる。

一九五九年の帰国事業は、朝鮮総連が主体となって推進されたものである。一九五〇年

代半ばから、北朝鮮婦国の要求が高まっていたが、その後数年間における生活保護費の打ち切りや、金融機関からの貸し渋り、そして就職難など、在日朝鮮人に対する民族差別による生活難のため、日本で将来の見切りをつけた人々は、南出身の者まで北朝鮮に帰国を希望していた。一九五五年、「朝鮮人帰国希望者東京大会」が開催され、在日朝鮮人側からの運動と国際赤十字委員会の協力によって、帰国事業計画が進められる。新聞は帰国事業を歓迎し、人道的な事業と捉えていた²⁴。住井はこのような動きを意識していたはずである。

国家間の戦争、植民地、そして虐げられる最下層の人々を見ると、あくまでも住井は天皇制を頂点とする国家の枠組の中で捉えようとしている。『橋のない川』では、震災後、「小森」に戻ったはるえが、水平社の運動員であり、畑中孝二の従兄弟でもある和一と会う場面がある。

和一是東京の知り合いを見舞った帰りに「小森」に立ち寄り、はるえに東京の惨状を語る。和一は、「これが現在の世の中だす。表向きは日本の警察、日本の軍隊というるけども（中略）日本を支配してる人らをまもるためのものだすワ。（中略）もし上に立ってる人らに、ほんまに人間を人間として見る温かい心があるんやったら、なんで皇室や財閥にあだ成す危険な奴らやいうて、朝鮮人と社会主義者を大量に虐殺するなんてむごいことが出来ますかいな」（六巻、九八頁）と憤慨するが、この言葉によって、はるえは、夫が国家権力によって死に追いやられたことを理解し、涙を流す。ここでは、部落民が内地在住朝鮮半島出身者の境遇を深く思いやっており、また同時に、同じ境遇の者同士としての連帯意識が描き出されている。そして両者の融合をシンボライズした存在として、はるえと内地在住朝鮮半島出身者の夫婦が登場したのである。

櫻本は、『Ronza』での作家紹介に、戦前の住井が無産婦人芸術連盟に参加したことを書いている。「夫の病気の看護と生計を支えることと育児に追われ、存分の活動ができぬまま戦争を迎え、そこでようやく独自の視点で農民の生態を書きこむことができ」²⁵というくだりからは、戦時迎合作家であったことへの批判が先行するのではなく、生活を守るためにやむをえず書かざるを得なかった作家への理解が見てとれる。櫻本が問題にしているのは、過去の戦争に加担した責任ではなく、現在から過去を振り返って自己を反省する弁がなかったことである。

住井は、敗戦後、ようやく反権力・反戦を標榜して活動を始めた作家であり、部落解放運動においても、戦前から身を投じた運動家ではなかった。敗戦後の解放運動と在日朝鮮人問題の帰還運動に沿って描かれたのが『橋のない川』なのである。

4. おわりに

『橋のない川』は、大正当時の史実に沿って描かれた作品ではなく、一九五〇年代から六〇年代にかけての部落運動の盛り上がりと、在日朝鮮人問題によって社会的な意識が高

まった時期に、差別に苦しむ人々の連帯が理想化されて描かれた物語である。白丁を取り上げたことについて言えば、住井が『橋のない川』を執筆していた時点ですでに戦争の動乱によって白丁差別問題は不可視化されていた。住井は、昭和三〇年代の帰国事業という社会的な出来事に触発され、内地在住朝鮮半島出身者の問題を作品中に大きく取り上げ、部落民との融和的な交流を描いたが、植民地下にあった朝鮮半島の人々と、白丁に対する理解が不足している。これは、住井が自分の主義に引き寄せて部落民、内地在住朝鮮半島出身者、白丁を「天皇制の下で差別に苦しむ同胞」というカテゴリーに単純化して入れてしまったためである。

住井にとっては、部落民と朝鮮人が等しく置かれ、彼らの苦難の全ての原因が天皇制となっているのである。それは、一面においては真実であり戦後天皇の戦争責任が問われないうままになっている現在、真実を鋭く追及するものであったが、天皇制に終始して、他の問題を見えにくくしてしまっている。当時、部落と部落外は差別によって分断され、そしてまた、一般の部落民と内地在住朝鮮半島出身者の間にも埋められない溝があった。苦しんでいる者同士が手を結び、権力が作り出した差別に向かっていくという姿は小説的には美しいが、あくまで住井によって創作された姿なのである。

とは言え、『橋のない川』一作品だけをみたとき、方言が盛り込まれたローカリティ豊かな魅力を持つ物語であること、そしてまた、重いテーマを扱いながら、部落問題に対する社会の認識を変えるほどの影響力を持った作品であったことは認めなければならない。部落発生の起源について、作品中でも住井はいく度も解釈を試みており、歴史が侵略者によって容易に書き換えられ得ることを示している。住井が敗戦後発表した小説は、すべてに身分差別、貧困、反戦、といったテーマが盛り込まれている。これは、敗戦後の住井の一貫した姿勢であった。

権威の神格化は、住井が最も嫌うものであった。前田は、信奉者たちによって住井が神格化されることを懸念しているが²⁶、作家の全体像に対する理解を深めるためには、戦前の作品を今後も掘り起こしていくことが不可欠であろう。

注

- 1 最終的な定本としては、新潮文庫から一九九七年、『住井すゑ作品集』が出版されており、標準語から方言への数箇所の書き換えがなされた『橋のない川』の改訂版が収められている。本論での『橋のない川』からの引用はすべて、新潮文庫版、『住井すゑ作品集』（一九九七年）からのものである。
- 2 白丁のルーツは高麗時代（九三六～一三九二）にまでさかのぼると言われており、異民族説、政治犯説などがある。族譜（戸籍）を持つこと、常民との通婚、職業選択の自由などが厳しく禁止されていた。参考（金永大『朝鮮の被差別民衆』解放出版社、一九八八）。
- 3 これは住井の一貫した主張であったが、有名なのは、住井が九十歳の時に行った武道館での講演である。この時の模様は、『九十歳の人間宣言』（岩波書店、一九九二）にまとめられている。
- 4 小原亨「討議」『部落問題研究』一六四号、（部落問題研究所、二〇〇三）。小原は、『橋のない川』に

は天皇批判はあるのだが、天皇制の国家構造の中での身分制が部落差別の根幹にあるのだという国家論はない」と述べている。

- 6 川端俊英「部落問題文芸研究三〇年の歩み一部落問題研究所創立六〇周年に寄せて」『部落問題研究』一八五号、(部落問題研究所、二〇〇八)。
- 6 注4に同じ。
- 7 桑原律「住井すゑの児童文学の思想と作風」『部落問題研究』一六四号、(部落問題研究所、二〇〇三)。
桑原は、住井の児童文学には思想が如実に表れているものの、「テーマ性」があらさまで、読後の感動を損なうと指摘している。
- 8 『子供の村』は『住井すゑ作品集 第三集』(新潮社、一九九九)に収録されている。
- 9 前掲書、二〇九頁。
- 10 前掲書、二一〇頁。
- 11 前掲書、二一三頁。
- 12 前掲書、二一四頁。
- 13 前掲書、一七七頁。
- 14 櫻木富雄「住井すゑにみる『反戦』の虚構」『Ronza』第五号(朝日新聞社、一九九五)。
- 15 住井すゑ『『橋のない川を書き終えて』』『部落』第二六号、(部落問題研究所、一九七四)。
- 16 上田正昭『奈良の部落史に学ぶ』(明石書店、一九八九)の年表による。
- 17 上原善広『コリアン部落一幻の韓国被差別民・白丁を探して』(ミリオン出版、二〇〇六)。
- 18 塚崎昌之「水平社・衡平社との交流を進めた在阪朝鮮人—アナ系の人々の活動を中心に」『水平社博物館紀要』九巻、(水平社博物館、二〇〇七)。
- 19 第六巻、四九頁。
- 20 塚崎昌之、河明生、杉本弘幸、高野昭雄など。いずれもこの一〇年の研究である。
- 21 杉本弘幸「戦前期「不良住宅地区」の変容過程(上)(下) — 「不良住宅地区「被差別部落」・在日朝鮮人」『部落解放研究』一三六号、一三七号、(部落解放・人権研究所、二〇〇〇)。
- 22 河明生「被差別部落民と在日韓人—社会経済史的視点」『現代思想』二七巻、(青土社、一九九九)。
- 23 西田芳正「競合と共棲—在日韓国・朝鮮人と被差別部落の関係性をめぐって」『フォーラム現代社会学』二号、(関西社会学会、二〇〇三)。
- 24 朴慶植『解放後 在日朝鮮人運動史』(三一書房、一九八九)。
- 25 注14に同じ(一一頁)。
- 26 前田均「住井すゑの戦時下の作品について」『天理大学人権問題研究室紀要』(天理大学人権問題研究室、一九九八)。